

口腔内に腫瘍のみられた犬の64症例

| | |
|-------|--|
| 誌名 | 山口獣医学雑誌 = The Yamaguchi journal of veterinary medicine |
| ISSN | 03889335 |
| 著者名 | 山岡,佳代 八村,寿恵 和田,慎太郎 大成,衷子 網本,昭輝 |
| 発行元 | 山口県獣医学会 |
| 巻/号 | 40号 |
| 掲載ページ | p. 31-35 |
| 発行年月 | 2013年12月 |

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



症 例

口腔内に腫瘍のみられた犬の64症例

山岡佳代¹⁾・八村寿恵¹⁾・和田慎太郎¹⁾・大成衷子¹⁾・網本昭輝¹⁾

[2014年3月7日受付・2014年3月31日受理]

CLINICAL CASE

A study of oral masses in 64 dogs

Kayo YAMAOKA¹⁾, Hisae HACHIMURA¹⁾, Shintaro WADA¹⁾, Atsuko ONARI¹⁾, Akiteru AMIMOTO¹⁾

1) *Amica pet clinic*

3-2-3, Onda-cho, Ube-shi, Yamaguchi 755-0023, Japan

A retrospective study was conducted on 87 intraoral sites in 64 dogs where masses were surgically removed and subjected to histopathological examination between March 2003 and July 2013. The posterior gingiva was the most common site for oral masses, suggesting that their detection may be difficult without opportunities for oral screening. Inflammatory lesions accounted for 59.8%, neoplastic lesions for 35.6% (benign 18.4%, malignant 17.2%), and other lesions for 4.6%. The most common histopathological diagnosis was fibromatous epulis, followed by melanoma and ossifying epulis. Oral check-ups by veterinarians during clinical visit as well as home care by owners seem to be important for early detection and treatment of intraoral abnormalities.

Key words : dog, oral mass

要 約

2003年3月から2013年7月までに口腔内腫瘍を摘出し病理組織検査を実施した犬64頭, 87カ所について回顧的調査を行った。発生部位は臼歯部の歯肉が最も多く, 口腔内を観察する機会がないと発見しにくい可能性が示唆された。疾患分類では炎症性疾患が59.8%, 腫瘍性疾患が35.6% (良性腫瘍18.4%, 悪性腫瘍17.2%), その他の疾患が4.6%であった。病理組織診断名で最も多かったのは線維性エプリスであり, 次いで悪性黒色腫, 骨形成性エプリスの順であった。口腔内の異常に早く気づき, 早期に治療を行うためには診察時の獣医師の口腔内観察と家庭での飼い主のホームケアが大切であると思われた。

キーワード : 犬, 口腔内腫瘍

1) アミカペットクリニック

* 連絡責任者・山岡佳代 (アミカペットクリニック)

〒755-0023 宇部市恩田町3-2-3 TEL 0836-34-2861 FAX 0836-22-3341

E-mail : info@amicapet.co.jp

はじめに

近年、口腔内衛生が注目されてきており、腫瘍などの口腔内病変に飼い主が気付くことも増えてきている一方、部位によって発見しにくいものや、症状を示しにくいものもあり、診察時や手術時に発見されることも多い。口腔内の腫瘍には、大きく分けて腫瘍性のもので炎症性などの非腫瘍性のものであるが、一般的に腫瘍の場合には悪性のものであるといわれている^{3,10)}。また口腔は4番目に腫瘍が多く発生する部位であり、犬の腫瘍の6%を占めるとされている^{1,3,5,6)}。

今回我々は、当院で口腔内に発生した腫瘍を摘出し、病理組織検査を実施した症例について回顧的調査を行ったので、その概要を報告する。

症 例

2003年3月から2013年7月までに病理組織検査を実施した犬767頭のうち、口腔内腫瘍の検査を行った64頭、87カ所について、年齢、性別、犬種、腫瘍の発生部位、病理組織診断について調査した。

成 績

年齢は9ヵ月齢から16歳齢、性別は雄31頭、雌33頭、犬種は雑種15頭、ゴールデンレトリバー6頭、チワワ5頭、トイプードル4頭、シーザー4頭、ミニチュアダックスフンド4頭、ウェルシュコーギー4頭などの21犬種であった (Fig.1)。

腫瘍の見られた部位は歯肉に発生したものが68例 (78.2%) (上顎切歯部9例、下顎切歯部4例、上顎犬歯部10例、下顎犬歯部7例、上顎臼歯部24例、下顎臼歯部14例)、口蓋に発生したものが6例 (6.9%)、舌およびその周囲に発生したものが6例 (6.9%)、頬粘膜に発生したものが4例 (4.6%)、口唇粘膜に発生したものが3例 (3.4%) であった (Fig.2)。

これら87例の病理組織診断結果は炎症性疾患が59.8%、良性腫瘍が18.4%、悪性腫瘍が17.2%、その他の疾患が4.6%であった (Fig.3)。

疾患発生状況を年齢別にみると、炎症性疾患と腫瘍性疾患は中～高齢に多く発生し (Fig.4)、その他の疾患以外の3疾患では発生年齢に有意差は認められなかった。

発生部位別では歯肉と舌・舌周囲、頬粘膜に発生したものでは炎症性疾患が多くみられたが、口蓋と口唇粘膜では悪性腫瘍の占める割合が高かった (Fig.5)。

病理組織診断名では、すべての腫瘍の中で最も多かったのは線維性エプリスで腫瘍全体の44.8%、炎症性疾患のうちの75.0%を占めていた。次いで悪性黒色腫が腫瘍全体の10.3%で悪性腫瘍の60.0%、骨形成性エプリスが腫瘍全体の9.2%で良性腫瘍の50.0%であった (Fig.6)。

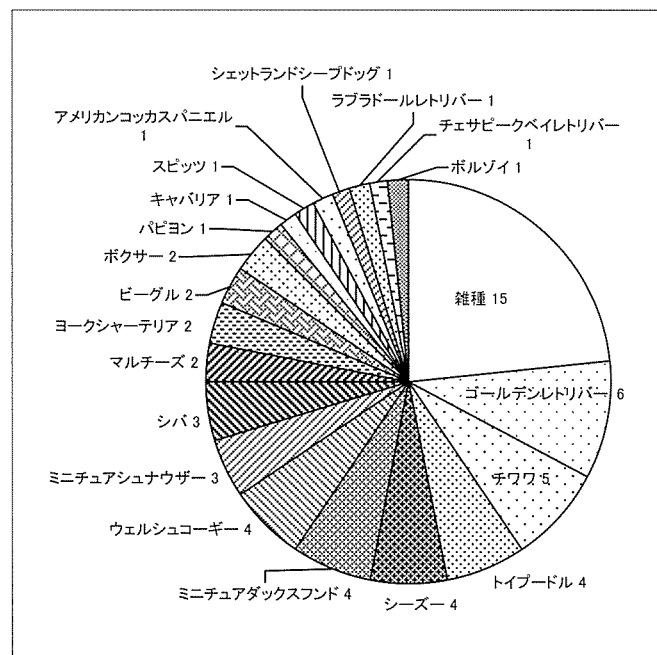


Fig.1 犬種。数字は頭数を示す

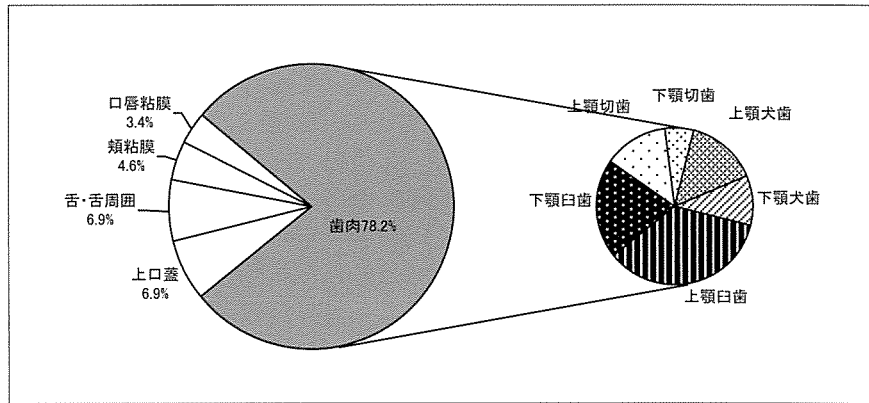


Fig.2 口腔内腫瘍の発生部位

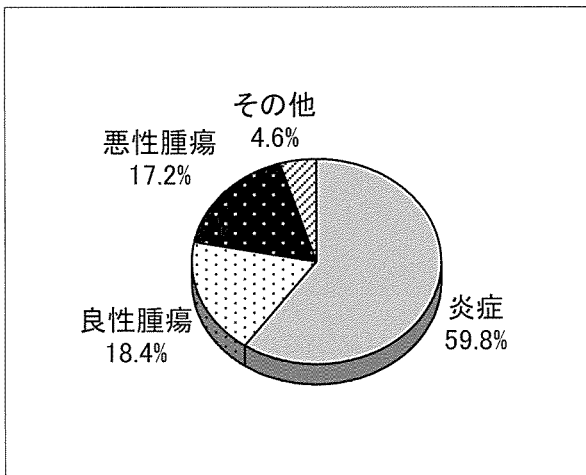


Fig.3 疾患分類

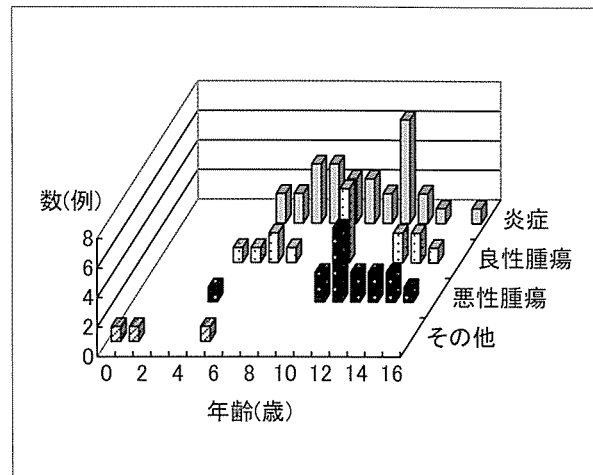


Fig.4 年齢別の口腔内腫瘍発生状況

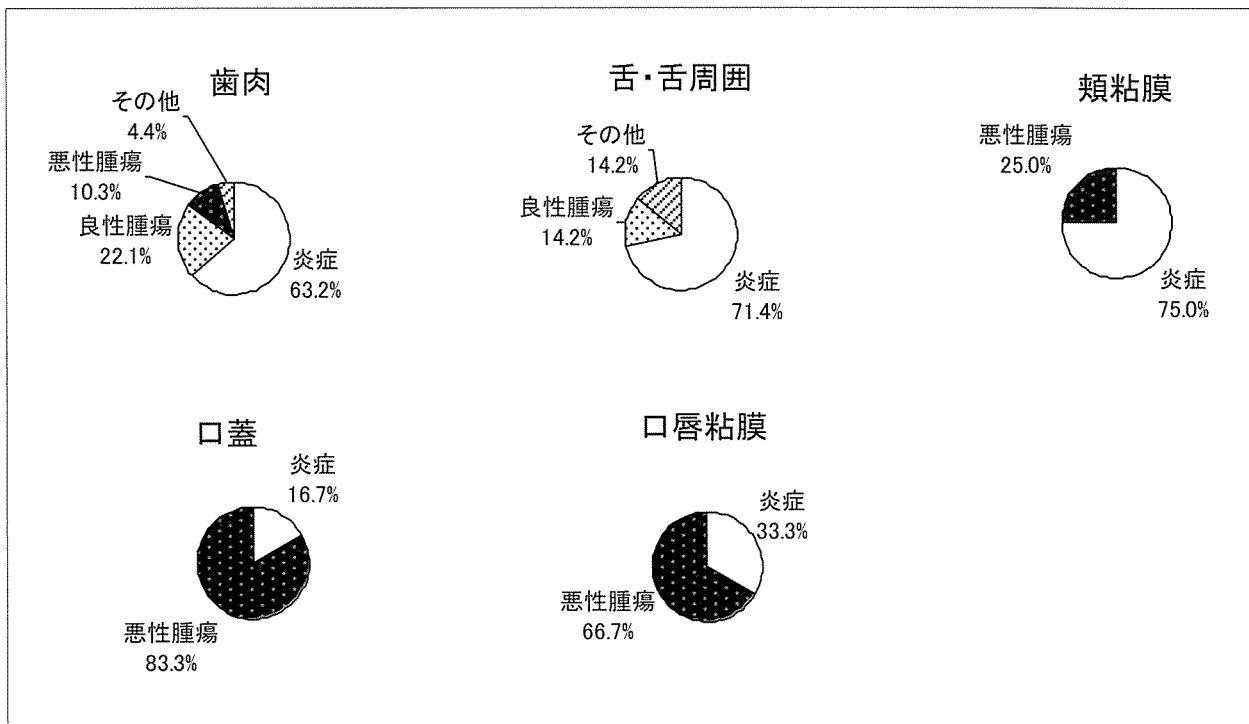


Fig.5 発生部位別に示した口腔内腫瘍の疾患分類

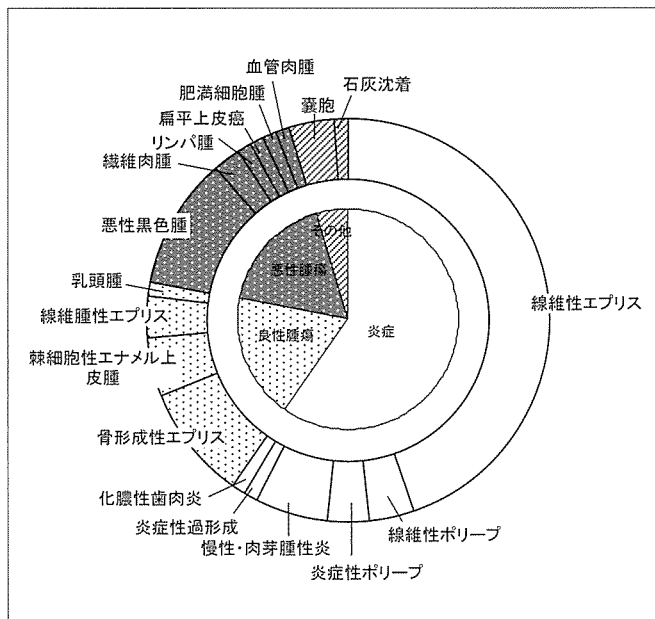


Fig.6 病理組織診断名

考 察

今回の調査では犬の口腔内腫瘍の発生には雌雄差はなく、犬種にも大きな偏りは見られなかった。疾患別の発生年齢では炎症性疾患と腫瘍性疾患で有意差はなく、中～高齢のものに発生する傾向があった。そのため中高齢以降の犬では口腔内腫瘍にも注意を払う必要があると思われる。

発生部位としては78.2%が歯肉に発生していたが、中でも臼歯部歯肉に多く見られたため、口腔内を観察する機会がないと発見しにくい可能性が示唆された。また発生頻度は少なかったものの、口蓋や口唇粘膜に発生したものは悪性腫瘍の割合が高い傾向があったため、口腔内を観察した際に、このような部位に腫瘍が見られた場合には早期に対応する必要があると思われる。

今回の調査では59.8%が炎症性疾患であり、最も多く見られたのは線維性エプリスであった。エプリスとは歯肉に生じた増殖性腫瘍を総称した臨床名であり、病理組織検査を実施して初めて診断名が確定する。獣医病理学領域でのエプリスの分類は確立されておらず、様々な分類が検討されているが^{2,7,8,11)}、現在のところエプリスは炎症性(反応性)エプリスと腫瘍性エプリスに大別されている^{7,8)}。今回最も多く見られた線維性エプリスは炎症性エプリスに分類され、過去の報告でも線維性エプリスは犬のエプリスの中で最も発生率が高い¹²⁾。また、炎症性エプリスは歯肉の固有層・歯根膜・歯槽骨膜への何らかの外的刺激で生じるとされているため、歯石除去やその後の歯磨きなどを徹底し、歯肉炎等を予防することで発生率を減少させることも可能であると思われる。

今回の調査では、腫瘍と診断されたものの良性腫瘍と悪性腫瘍の割合は約1:1であった。大学などの二次病院では犬の口腔内腫瘍の60～70%が悪性であったという報告がある^{3,10)}。これは我々一次病院で対応しにくいような腫瘍の場合には大学等の二次病院に上診することが多いというのも一つの理由であると思われるが、肉眼では良性腫瘍と悪性腫瘍の見分けは困難であるため⁶⁾、いずれにしても早い対処が望まれる。特に今回、腫瘍性疾患の中で最も多くみられた悪性黒色腫は転移率もかなり高く^{1,3,5)}、腫瘍自体の大きさも予後因子の一つとされている^{3,5)}。そのため、我々一次病院で腫瘍が小さい早期のうちに発見し、治療することができれば予後の改善にもつながるものと思われる。

なお、棘細胞性エナメル上皮腫は病理診断では良性腫瘍に分類されるため今回の調査では良性腫瘍に分類したが、顎骨へ浸潤しやすい腫瘍であり、臨床的には悪性の動向を示すといわれているため注意が必要である^{3,4)}。

以上のことより我々一次病院では口腔内腫瘍を早く発見し、早期に治療を行うことが大切である。そのためにはワクチン接種時など、犬の若齢時から、飼い主に犬の口腔衛生に関心をもってもらい、家庭での観察およびホームケアができるよう指導すること、日常の診察時に口腔内観察も行っていくことが重要であると思われる。

参考文献

- 1) 藤田道郎監訳：犬と猫の腫瘍学－治療へのアプローチと予後判定－：128～142. インターズー, 東京 .2005.
- 2) Gardner D.G.: Epulides in the dog: a review. *J. Oral Pathol. Med.*, 25:32～37. 1996
- 3) 星野有希：犬と猫の口腔内腫瘍. *J-VET*, 270:57～64. 2009.
- 4) 日本獣医病理学会編：動物病理学各論：172. 文永堂出版, 東京 .1998.
- 5) 大崎智弘：口腔内腫瘍の種類と治療におけるエビデンス *CAP*, 281:8～18. 2012.
- 6) 小川博之 佐々木伸雄 中間寛徳監修：犬と猫の腫瘍－内科的管理と外科的管理－：479～486. 学窓社, 東京 .2004.
- 7) 奥田綾子・山上哲史・中野康弘：エプリス. *SERGEON*, 10:3～45. 2006.
- 8) 奥田綾子：エプリス. 日本獣医病理学専門家協会学術大会講演要旨集：67～70.2014.
- 9) Reichart P.A., Philipsen H.P. and Dürr U.M.: Epulides in dogs. *J. Oral Pathol. Med.*, 18:92～96. 1989
- 10) 信田卓夫：犬・猫の口腔内に発生する腫瘍に対する臨床的アプローチ. 第15回日本臨床獣医学フォーラム年次大会プロシーディング：113～114. 2013.
- 11) Verstraete F.J., Lighthelm A.J., and Weber A. :The histological nature of epulides in dogs. *J. Comp. Pathol.*, 106:169～82. 1992
- 12) Yoshida K, Yanai T, Iwasaki T, Sakai H, Ohta J, Kati S, Minami T, Lackner AA and Masegi T: Clinicopathological study of canine oral epulides. *J. Vet. Med. Sci.*, 61:897～902. 1999.